

集団育児の社会的再生に対する 考察

A study of social reclamation
of child-rearing in a
community

1. 論文タイトル：

集団育児の社会的再生に対する考察

2. 論文タイトル（英語）：

A study of social reclamation of child-rearing in a community

3. キーワード：

産後鬱 現代社会 アロマザリング 育児

4. 論文要旨

現在の日本では産後鬱が問題視されるようになった。今までも「産後鬱」というものは存在していたが、なぜ問題視されるようになったのか。産後鬱によって自殺に追い込まれるケースや、子供に虐待するケースが目立ち始めた。

これらの原因には、育児に専念するための環境が逆に社会から切り離され、母と子の密室環境を作り出し、嫌でも終始子供のことを考えなければならない環境下におかれることが考えられる。大半の人が初めて行なう育児に対して悩みを打ち明けられる環境がないのではないかと考えた。

そこで、人間本来の育児の仕方はどういったものであったのか。これを明らかにするために、アロマザリングは必要であると感じているが現代社会には定着していないのではないかという仮説を立て、子どもを持つ母親へのアンケート調査を実施し、実態の把握に努めた。

本稿は、現在日本が直面している育児問題を見つめ直し、本来の人間の育児の姿をチンパンジーの育児方法と比較し明らかにした上で、新しい解決の糸口を見つけ出す事を目的とする。

以下、第一章では核家族化などによって引き起こされる現代育児の問題を述べ、第二章ではチンパンジーとヒトの育児方法を比較しヒト本来の育児のありかたをアロマザリングという考え方を通してみていく。第三章ではアロマザリングは必要であると感じているが現代社会には定着していないのではないかという仮説を立て、子供をもつ母親にアンケート調査を実施し、その実態について明らかにし、第四章では総括として結論をまとめる。

5. 論文要旨

In Japan, postpartum depression is not a hot issue. In recent years, however, its consequences has become more severe such as taking their own lives and abusing their own child.

The environment of child-rearing is more capsulized, only the mother and child relationship, seems to be the reason. Mother immature of child-rearing but has to solve problems by herself with no help from the society.

What is the proper way of child-rearing. We gathered surveys that allomothering is needed but yet not applicated.

In the report, again staring at the child care problem that currently Japan is facing, the appearance of the original human of childcare in terms of revealed compared to child-rearing method of chimpanzees, which aims to find the clue of the new resolution.

Below, in the first chapter describes the problems of the modern child care caused by such as the nuclear family, in the second chapter will try through the idea of the aroma ring way of comparison to the human original child-rearing a child care method of chimpanzees and humans. In the third chapter I feel that aroma ring is a necessary but hypothesized that or not is not well-established in the modern society, conducted a questionnaire survey to mothers with children, and to clarify the actual situation, the first It summarizes the conclusions as summarized in Section four.

【目次】

第 1 章 現代子育ての現状

第 1 節 家族形態の変化

第 2 節 地域コミュニティの希薄化

第 3 節 産後鬱

第 2 章 本来の育児機能

第 1 節 アロマザリング

第 2 節 チンパンジーとヒトの差から見るアロマザリング

第 3 章 アンケート結果による考察

第 1 節 アンケート調査

第 2 節 子育てに対する改善策

第 4 章 現代の育児にアロマザリングがもたらす可能性

参考文献・データ出典

第 1 章 現代子育ての現状

日本の子育てをめぐる議論は様々な場所で多くの論者によって取り上げられている。なかでも少子化問題は高齢化社会とともに近年きわめて深刻な問題となっている。日本の年間出生数は、第一次ベビーブーム期¹には約 270 万人、第二次ベビーブーム期²には約 200 万人であったが、1975 年に 200 万人を割り込み、それ以降、毎年減少し続けている。2012 年には第二次ベビーブームの半分以下である約 100 万人にまで落ち込んだ。³⁴さらに未婚化や晩婚化といった風潮もこの傾向を強める要因となっている。こうした状況の背景として、育児に関する精神的・身体的・経済的な負担や、家庭・育児と仕事の両立が困難な職場での働き方に加え、核家族化や都市化の進展などによる家庭の養育力の低下や地域における相互の助け合いの低下がある。かつては家族や近隣から得られていた育児に関する知恵や支援が得られにくいという問題点が指摘されている。⁵⁶

本章では、様々な角度から日本社会における育児環境の現状を考察し、そこに内在する諸問題を明らかにすることを目的とする。

第 1 節 家族形態の変化

家族形態はかつての規模を縮小し続け、現在では核家族化が進行している。同居する世帯数が減少しているのである。たとえば、祖父や祖母と親世帯、孫まで同居する三世代世帯の割合は 1980 年をピークに減少傾向になり、2012 年には約 320 万世帯と過去最低数を記録した。⁷それに反比例する形で核家族世帯⁸は増加した。三世代世帯は家事などを多くの世帯人員で分担することが可能となるが、核家族世帯は少ない世帯人員で担うこととなるため、男性の家事や育児への参加が求められるようになった。

核家族化に伴う世帯一人当たりの役割の増加を受け、育児の心理的、肉体的負担に耐えられないという理由から子供を持たない世帯も増加している。⁹これには女性の社会進出も影響している。

核家族世帯数と女性の社会進出数をグラフ化すると以下のとおりになる。

図 1 核家族総数と女性の社会進出数の推移

¹ 第二次世界大戦終戦後、子供の誕生が爆発的に増えた 1947 年から 1949 年ごろのことを指す。

² 第一次ベビーブームの世代が親になった 1971 年から 1974 年ごろのことを指す。

³ 内閣府「平成 26 年版少子化社会対策白書」参照。

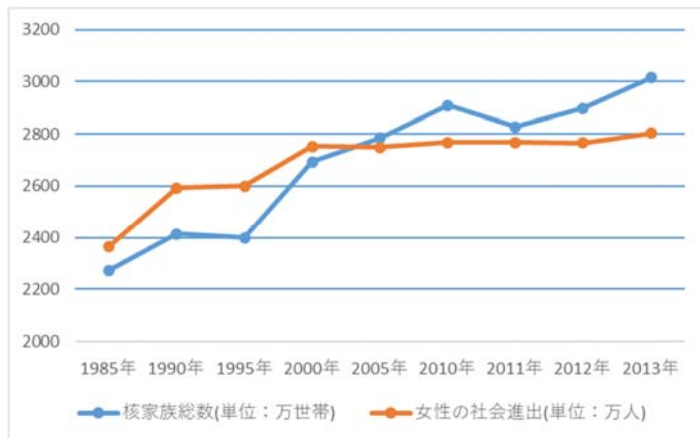
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-26webgaiyoh/html/gb1_s1-1.html（最終閲覧日 2014 年 9 月 21 日）

⁵ 内閣府「平成 18 年度版少子化社会白書」より引用。
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-18webhonpen/html/i1511110.html>

⁷ 内閣府「平成 26 年版高齢社会白書」参照。
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1_2_1.html

⁸ 夫婦とその未婚の子供からなる家族のことを指す。

⁹ 厚生労働省「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」参照。



内閣府「平成 27 年版国民生活基礎調査の概況」、内閣府「平成 18 年版少子化社会白書」より筆者作成

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/dl/02.pdf>

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2006/18webhonpen/html/i1511110.html>

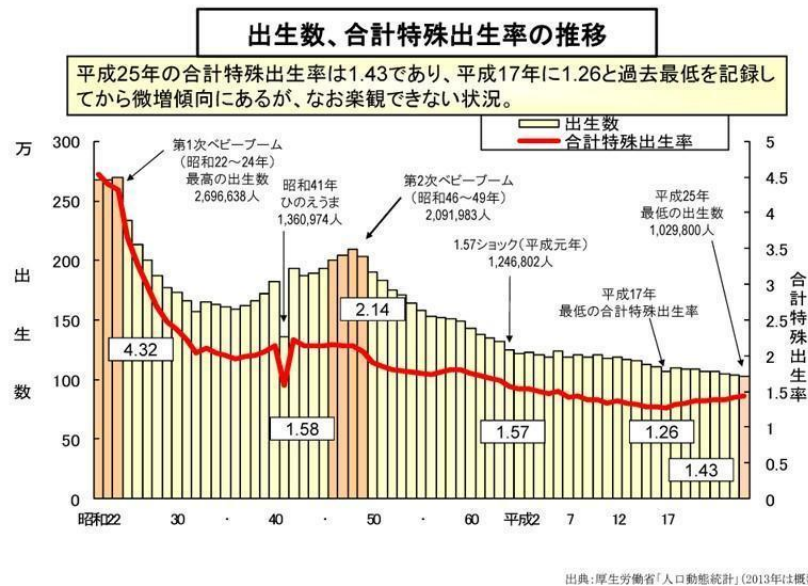
図にあるように、核家族世帯総数と女性の社会進出数は 1985 年を境に急激に伸び始めた。1995 年に一度増加ペースを落としたものの、その後また増加し、2005 年以降は核家族世帯がさらに伸びていることが読み取れる。2000 年以降に女性の社会進出数の伸びが停滞したのは、各種制度¹⁰の充実による、非正規雇用の拡大が影響している。¹¹

また、同時期の出生率については以下のとおりである。

図 2 出生数、合計特殊出生数の推移

¹⁰ 特に雇用保険制度改正による労働環境の改善が大きいとされている。日本労働組合総連合会「雇用保険制度の見直しにあたっての連合の考え方」参照。
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/sl_2_1.html

¹¹ 女性は男性と比べて非正規雇用比率の水準が高い。企業の人件費抑制姿勢が強まりコストの安い非正規雇用に対する需要が拡大したことで、女性を取り飽く雇用環境は好調に推移してきた。



内閣府「出生数」より引用

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/shusshou.html>

核家族化や女性の社会進出に比例しているとは言えないものの、先述した通り緩やかに減少傾向にある。これは、女性の社会進出が進む一方で、育児支援体制が十分でないことなどから、育児と仕事の両立の難しさが理由として挙げられる。また、核家族化の進行に伴った育児の孤立感や不安感も、これに起因していると考えられる。

第2節 地域コミュニティの希薄化

社会情勢の変化は、家族形態だけでなくその周囲の環境にも大きな変化を与えた。サラリーマン等、地域社会に依存しなくても生活できる社会になったことで、家庭が地域から孤立しやすい状況になってしまったのである。都市化の進行や女性の社会進出によって、地域にかかわる機会が少なく、地域に友人や知人がいないことも多々ある。加えて、地域では、隣近所と接点のない人が増え、地域の中で家庭や個人が孤立する「無縁社会化」が進み¹²、隣近所の子供に分け隔てなく接して面倒を見る機会、子育ての相談をする機会が減ってきている。¹³無縁社会化は、専業主婦の母親にも大きな影響を与えている。隣近所の人や地域と

¹² 愛知県では無縁社会化が進行し、お祭りや運動会といった地域の年中行事が年々減少傾向にあるとの報告が上がっている。平成 25 年度 NPO と行政の地域円卓会議「孤立化する子育て家庭を地域でどう支えていくのか」参照。

https://www.aichi-npo.jp/5_NPO_shien/1_aichiken/3_roadmap/road-map.pdf

¹³ 2008 年に愛知県が実施した「少子化に関する県民意識調査」によれば、「困ったときや不安な時に相談できる人がいない」人は、子育てに「喜びを感じる時が少ない」という傾向が

のつながりが薄れ、身近に困りごとや不安を気軽に相談できる相手がいないと、誰もが不安に思う程度の小さな育児の悩みであっても、一人で抱え込んで悩んでしまい、孤立していると感じやすい。特に、核家族の専業主婦は、育児にかかわる時間が長く、さらに、夫が長時間労働をしている場合にあっては、子供以外の人と言葉を交わす機会も少なく、孤立感を深めやすい状況にある。¹¹

第 3 節 産後鬱

これらの育児環境により、いままでそれほど可視化されてこなかった育児をめぐる諸問題が浮かび上がってくるようになった。たとえば、産後鬱などがそれに当たる。現在、産後鬱の発症率は 10.3%¹⁴¹⁵と推計する議論もあり、これは一般の人の発症率をはるかに超える確率であるとされている。また、産後鬱が原因とされる自殺者も 2005 年から 2014 年の間に東京 23 区内だけで、63 人にも上ること言われている。¹⁶このような死亡者は 10 万人に対して約 8.5 人にも上る。つまり、他の病気や障害で亡くなる妊産婦より、自殺で亡くなる数の方が 2 倍以上も多いことになる。そして「産後鬱」で命を落とすのは必ずしも母親だけではない。子どもが心中以外の虐待により死亡した家庭の母親の 7.1%、心中による虐待死に至った家庭の母親の 6.9%が「産後鬱」であったことがわかっている。

産後鬱が今日表面化してきた大きな原因は、日本の子の養育における母親の排他的重要性を強調する文化にある。ヒトが誕生して以来の育児システムと現在の日本の育児システムとの乖離がはなはだしく、本来は多くの人に関わって行われてきた育児体制だったものを、親だけが責任をおうような社会通念がまかり通ってしまっているように考えている。しかし、この社会通念が親（母親）の足かせになってしまい、育児を辛く感じる人が多くなっているのではないだろうか。これらの解決のために、ヒト本来の育児システムがどのようなものであるかを、日本人は正しく認識する必要がある。

第 2 章 本来の育児機能

ここではヒトが誕生して以来の育児システムについて考察し、現在の日本社会との距離がどれほど離れているのかを検討することとしたい。本来、人間の育児は、長期的かつ複数の子供の面倒を同時に見なければならぬ事態が珍しくない。こうした人間の育児には、複数の手による養育、非血縁者による養育が不可欠である。かつての日本の育児は、母親以外に、父親や祖父母といった血縁者、近隣住民などの地域コミュニティの人々などの協力によって成立していた。

しかし、現在の日本の育児の現状では、第 1 章で述べた通り、母親以外の育児参加が著しく少なくなっている。日本の父親の育児関与は他国として比較して際立って少なく、ほとんど不在といってもいい状況にある。その結果、母親は子供との密室育児を余儀なくされ、顕著な強い育児不安・育児ストレスを感じる結果となってしまった。では、人間にとって正し

みられた。

¹⁴ 毎日新聞「産後うつ 対策へ指針 問診で早期発見 産科学会方針」参照。

<http://mainichi.jp/articles/20160222/ddm/001/100/172000c>

¹⁵ 厚生労働省「自殺・うつ病等の現状と対策」参照。

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000032833.pdf>

¹⁶ 毎日新聞「妊産婦自殺 10 年で 63 人...東京 23 区 産後うつ影響か」参照。

<http://mainichi.jp/articles/20160424/k00/00m/040/088000c>

コメントの追加 [1]: このような説明はいらない、誰でも知っている言葉にわざわざ注を付けるのを以下全てとりなさい。

い育児の方法とはどのようなものなのだろうか。

第 1 節 アロマザリング

人間に限らず、動物の子供の育児は、その母親や父親のみに担われているというわけではない。集団生活が個体にとって何らかの利点をもつとすれば、子育ての負担を集団成員間でシェアするということはその利点の一つであろうと考えられる。¹⁷アロマザリング (allomothering) とは、そういった子供を取り巻く母親以外の個体による世話行動のことである。¹⁷アロマザリングは、動物の中でも霊長類がより多様なものを見せるが、¹⁸その中でも人間のアロマザリングは特に発達している。^{19,20}人間の育児には、家族や専門家・隣人など母親以外の多様な人たちがかわかっており、それはアロマザリングのネットワークととらえることが可能である。そして、実際に母親はそのアロマザリングを有効に活用し子として自らの活動に励んできたし、また同時に子供もそのような育児様式に適応してきた。^{21,22}

人間のアロマザリングはさまざまなところで行われてきた。母子にとって一番身近な例が父親によるアロマザリングである。²³特に日本では婚外子の出生率が著しく低く、約 98%の子供が結婚という法的な絆を結んだ両親のもとに生まれてくる。²⁴欧米に比べれば離婚率も低いので、多くの子供は父親母親と生活を共にすることになる。しかしながら、現在の日本の父親の育児量は、子供と一緒に暮らしていながら、母親と比較するとかなり少ない。²⁵そのため、父親は子供と一緒に食事をしたり、話をするなど、同じ空間で生活していることで必然的に発生するかかわりが中心となり、母親が中心となって行っている子供に何かを教える、子どもを見守るなどの、子供のために能動的に時間を割く必要のある行動の遂行率が低くなる。²⁶これらのことから、父親の育児関与は趣味的・受動的な特質をもつことがみえてくる。²⁷

沖縄県の離島である多良間島では、こうしたアロマザリングが現在でも確認できる珍しい

コメントの追加 [2]: 話が上とかなり変わるのだから、誰か、上下のつながりを考えて文章を作れ。

コメントの追加 [3]: ここに注、引用文献、日本語だけではなく各国語のものも読んでいないものでもよいから 10 冊程度入れる。

コメントの追加 [4]: ここも注必要

¹⁷ Chism,J(2000).Allocare patterns among Cercopithecines.*Folia Primatologica*,71,pp55-66

¹⁸ 伊藤嘉昭、『社会生態学入門—動物の繁殖戦略と社会行動』東京大学出版会、1982 年、pp159-171

¹⁹ 明和政子、「社会的活動の進化」『BRAIN MEDICAL』21(2)、2009 年、pp173-179

²⁰ 松沢哲郎、『進化の隣人—ヒトとチンパンジー』岩波書店、2002 年、pp21-45

²¹ 柏木恵子、根ヶ山光一『ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える』有斐閣、2010 年、pp11-24

²² 柏木恵子、『子どもが育つ条件—家族心理学から考える』岩波書店、2008 年、pp62-68

²³ 東洋・柏木恵子・ヘス、R.D.、『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会、pp14-35

²⁴ 厚生労働省「平成 19 年国民生活基礎調査」参照。

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/zentaiban.pdf>

²⁵ 内閣府「夫の協力—少子化対策」参照。

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html>

²⁶ パロン＝コーエン,S、『共感する女脳、システム化する男脳』、2005 年、日本放送出版協会、pp104-118

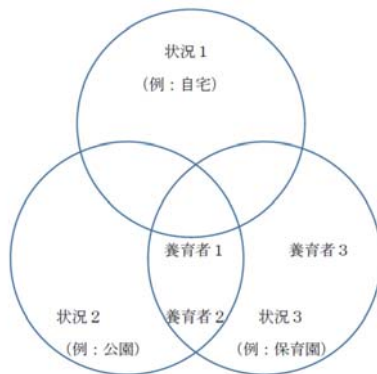
²⁷ 柏木恵子、根ヶ山光一『ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える』有斐閣、2010 年、pp145-156

環境である。²⁸多良間島は 1998 年からの 5 年間、合計特殊出生率²⁹³⁰が全国一であり子供の数が多。さらに四方を海に囲まれている離島である。こうした環境なゆえに、島内では頻繁にアロマザリングを確認することができる。例えば保育園の送り迎えには母親だけでなく、父親、祖父母、親戚、ご近所、子供のきょうだいなどが行うなど、母親と子が排他的な緊密関係にはないことを表している。³¹

コメントの追加 [5]: 注、文献

コメントの追加 [6]: 注

図 3 複合的なアロマザリングの構造モデル



根ヶ山光一『アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート』新曜社、2012 年 p 80 より筆者作成

コメントの追加 [7]: 頁数必要

こうした多良間島のアロマザリングの構造を表したのが図 3 である。養育者 1 は常に子供と関わる機会がある親のような人物。養育者 2 は複数の機会で子供と関わる親の友人のような人物。養育者 3 はこの場合であれば保育士である。³²このように母親以外のすべての人物による養育が子供の享受する複合的なアロマザリングであるといえる。

コメントの追加 [8]: 以下注もこの本をいっぱい使う。何度も全部掲出する必要はない。下にあるように前掲書、○頁とせよ。他の本も何回も出てくる場合、同じ掲出の方法を取れ。

また、多良間島には「守姉」と呼ばれる独特の風習³³があり、小学生くらいの女の子が、

コメントの追加 [9]: 注は一つで、そのなかに複数文献を記載すればよい。なんだこれは？

²⁸ 根ヶ山光一『アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート』新曜社、2012 年、pp72-86

²⁹ 厚生労働省「人口動態統計特殊報告」（平成 10～14 年人口動態保健所・市区町村別統計）
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001049315&requestSender=search

³⁰ 総務省統計局「国勢調査」2000 年
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/index.htm>

³¹ 根ヶ山光一、前掲書、pp63

³² このほかにも何かの縁があつていきずりに近い形で子どもと接する養育者 4 の存在がある。（根ヶ山光一、前掲書、p80 参照）

³³ 半世紀前までの多良間島では生まれてくる子どもの 6 割ほどが守姉に育ててもらっていた。（根ヶ山光一、前、p140 参照）
久保けんお、杉本信夫、高江洲義寛『鹿児島沖縄のわらべ歌—日本わらべ歌全集 26』柳原出版、1980 年

もともと多良間島周辺の島でも「守姉」は存在していたが、現在まで残っているのは多良間島だけ。（根ヶ山光一「アロマザリングの島」における子育て）『日本教育心理学会総会発

血縁のないもしくは遠縁の親から頼まれてその赤ん坊の親代わりとなる。少なくとも 3 歳までは続けられ、その後も一緒に遊んだり世話をしたりして子守をする。³⁴この守姉という風習は、育児を母親だけのものとして封じ込めるのではなく、地域におけるネットワークの広がりの中でアロマザリングとしてなされているのである。

第 2 節 チンパンジーとヒトの差から見るアロマザリング

ヒト以外の霊長類社会にも、アロマザリングとみなすことのできる行動は見られる。この事実はアロマザリングの生物学的基盤を考えるうえで重要な示唆を与えてくれるが、しかし同時に見落としてはならない点もある。ヒト以外の霊長類におけるアロマザリング行動は、ヒトのそれと比べるとやはりその内容も頻度もずいぶん制約されている。³⁵

チンパンジーはヒトに近い霊長類の一種である。チンパンジーの母親は基本的に一人で出産、育児を行い、上の子供をゆっくり育て上げてから次の子供を産む。完全離乳までに要する期間は 4 年であるため、出産期間は 5 年から 8 年と換算できる。出産後間もない時期には、母親はほか個体が子供に触れることすら嫌がる。ただし、生後半年を過ぎ、自力で移動できるだけの運動機能が発達してくると、子供のほうからなじみのある個体に近づいていくため、一時的に他個体が子供の面倒を見る機会は増えていく。³⁶出産後まもなくは一時的なアロマザリングすら起こらない。その後、一時的なアロマザリングは比較的好く見られるものの、預かった子供に授乳する必要が生じるほど長時間にわたるアロマザリングは起こらない。それが野生チンパンジーのアロマザリングの基本である。³⁷

ヒトの場合、個人差、文化差が大きい、生後 2 年半を過ぎるころからは授乳なしで生きていけるといわれる。ただし、この時点で離乳イコール自立という関係が直ちに成立するわけではない。ヒトが心身ともに自立するまでに要する手間は、ほかの霊長類に比べて圧倒的に大きいことは自明である。にもかかわらず、ヒトは、子供が自立する前に次の子供を産むことが多い。³⁸特に現代人は授乳期間を短くする傾向にあるので、性周期の回復が早まり、出産機関が縮まる傾向にある。つまり、ヒトは、相対的に短い出産間隔で複数の子供の面倒を見る育児、幼い子供の面倒を見つつ、上の子供の世話も同時に見る育児のスタイルを進化の過程で選択してきたといえる。この点が、チンパンジーをはじめとした他の霊長類との間にみられる際立った相違点である。^{39,40}

では、ヒトはこうしたスタイルの育児をどのように成立させてきたのだろうか。それは、ヒトは複数の者が育児に参与するスタイルの育児を前提としているからだろう。核家族化が進んだ現代の日本では、育児に参与するものの数が極端に限定されている。その最たる例は、母親に育児の負担が集中する例であり、それは決して珍しいものではない。⁴¹しかし、近代

コメントの追加 [10]: やはり注、同上、○頁で良いから
いっぱい入れなさい

表論文集』日本教育心理学会、2015 年 8 月 19 日、pp6 参照)

³⁴ 根ヶ山光一、前掲書、pp130-137

³⁵ 中川尚史『サバンナを駆けるサル―バスタモンキーの生態と社会』京都大学学術出版会、2007 年、pp157-190

³⁶ 山口真美・明和政子・金沢創・友永雅己、「既知顔認知の初期発達—ヒト・ニホンザル・チンパンジーの比較発達実験」『電子情報通信学会技術研究報告』HCS2000-41、2000 年、pp21-28

³⁷ 西田利貞『チンパンジーおもしろ観察記』紀伊國屋書店、1994 年、pp18-32

³⁸ 根ヶ山光一「霊長類を通してみたヒト乳幼児の母子関係—反発性の視点から」『心理学評論』45、2000 年、pp399-410

³⁹ 東洋・柏木恵子『社会と家族の心理学』ミネルヴァ書房、1999 年、pp23-45

⁴⁰ 松沢哲郎『進化の隣人—ヒトとチンパンジー』岩波書店、2002 年、pp30-49

⁴¹ 佐倉統『進化論の挑戦』角川書店、1997 年、pp121-128

以前の子育ては、親だけでなく、祖父母、兄弟姉妹を含む家族を単位として行われていたし、地域社会からの関与も大きかった。⁴²こうした共同育児が成立していたからこそ、ヒトは複数の幼い子供の面倒を同時に見ることが可能であったし、実際、こうした出産と育児のバランスが進化史的に選択されてきたと考えられる。チンパンジーのように母親のみに負担が集中する育児は、ヒトにとっては生物学的に不自然なものである。⁴³

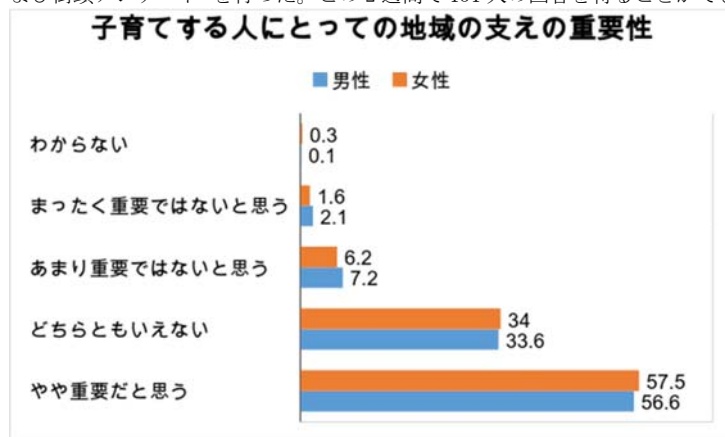
コメントの追加 [11]: 注 10 個以上必要

第 3 章 アンケート結果による考察

第 1 節 アンケート調査

人はもともと本能的に集団育児をするものであったが、核家族化や地域コミュニティの希薄化が進み、母親の育児に対する不安が増大した。そこで私たちは、現代の日本ではアロマザリングは必要だと感じているが定着していないのではないかと仮説を立てた。

この仮説を実証するために、私たちはアロマザリングに対する意識調査を行った。期間は 2016 年 9 月 5 日から 9 月 19 日の 2 週間。調査対象は子持ちの母親とし、SNS⁴⁴アンケートおよび街頭アンケート⁴⁵を行った。この 2 週間で 131 人の回答を得ることができた。



内閣府「平成 25 年度家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」より筆者作成
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/index.pdf.htm>

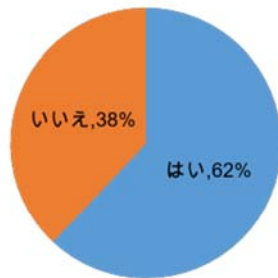
⁴² 大日向雅美『母性愛神話の罠』日本評論社、2000 年、pp58-65

⁴³ Nishida T.(1983).Alloparental behavior in wild chimpanzees of the Mahale mountains,Tanzania,*Folia Primatologica*,41,pp1-33

⁴⁴ SNS とは、ソーシャルネットワーキングサービス(Social Networking Service)の略称であり、今回のアンケートで利用した SNS は LINE と Twitter である。

⁴⁵ 街頭アンケートは、2016 年 9 月 6 日火曜日の 12:30~14:30 に新宿駅東口にて子供連れの母親を対象に行った。

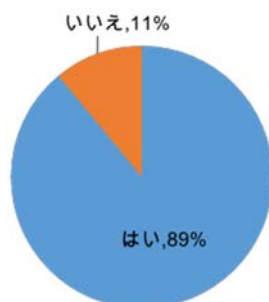
自分と同程度もしくはそれ以上に自分の子供の世話をしてくれる人がいましたか？

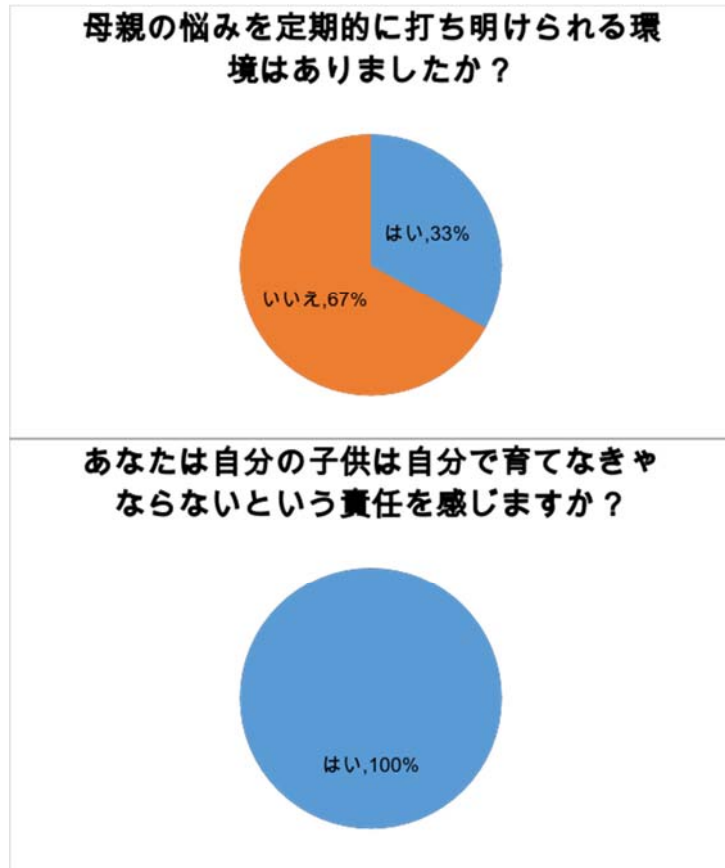


あなたは自分の子供と同程度、それ以上に他人の子供の世話をしたことがありますか？



母親としての悩みを抱えたことがありますか？





独自のアンケートより筆者作成

このアンケートは、子育てする人にとっての地域の支えの重要性に関するもので男女別に統計を取ったものだ。⁴⁶「とても重要だと思う」と回答した男性の割合は 56.6%、女性の割合は 57.5%で、「やや重要だと思う」と回答した男性の割合は 33.6%、女性の割合は 34.0%となっており、「とても重要だと思う」と「やや重要だと思う」を合計した男性の割合は 90.2%、女性の割合は 91.5%と男女ともに 9 割以上を占めている。このことから男性も女性も子育てをする際に地域の支えが重要だと感じている人がかなり多いことがわかる。

自分と同程度もしくはそれ以上に自分の子供の世話をしてくれる人がいたかのアンケートでは「はい」と回答した人が 62.3%、「いいえ」と回答した人が 37.7%、自分の子供と同程度かそれ以上に他人の子供の世話をしたところがあるかのアンケートでは「はい」と回答した人が 18.8%、「いいえ」と回答した人が 81.2%であった。これより他人の子供を世話した

⁴⁶ このアンケートは男性 723 人、女性 916 人に統計をとったもの。

り世話してもらったりする風習が薄れているといえる。⁴⁷

母親としての悩みを抱え込んだことはあるかというアンケートでは「はい」と回答した人が 89.3%、「いいえ」と回答した人が 10.7%であるのに対し、母親の悩みを定期的に打ち明けられる環境があったかというアンケートでは、「はい」と回答した人が 41.2%、「いいえ」と回答した人が 58.8%であった。また、自分の子供は自分で育てなければならないという責任を感じるかというアンケートは「はい」と回答した人がなんと 100%という結果になった。

⁴⁸

以上のアンケート結果から考察すると、9 割以上の人が地域の支えが必要だと感じているにもかかわらず、他人の子供を世話したり自分の子供を他人に預かってもらったりする風習があまりないことがわかる。また母親の悩みを抱えているが打ち明けられる環境の整備が不十分であり、自分の手で我が子を育てなければならないという責任感を負ってしまっていると考えられる。このことからアロマザリングは必要だと感じているが現代の日本に定着していないという仮説が構築できるだろう。

第 2 節 子育て問題に対する改善策

地域コミュニティの希薄化や核家族化によって社会から切り離された孤独感により母親は育児に対する不安を抱え産後鬱に陥ってしまう。また大抵の母親が子育ての初心者であるためさらに不安を感じてしまう。そこで 3 つの改善策をあげてみる。

1 つ目は母親同士のコミュニティの充実させることだ。⁴⁹例えば公園や図書館、SNS での育児に対する不安の軽減を目指し、地域に密着した活動を通じてネットワーク化を進めている法人や団体が増加してきている。⁵⁰特に NPO 法人が運営している「つどいの広場」と呼ばれる施設は子育て支援の拠点であり、全国に 5000 か所以上存在している。⁵¹またフランスでは緑の家⁵²という無料で利用できる施設がある。フランス国内に 300 か所あり、0～3 歳までが利用可能で、親の子供離れ、子供の親離れを支援しながら子供と家族の出会いの場を提供している。⁵³

2 つ目は子育てで体験だ。専門学校の実習では子育ての実習があるが普通は学ばずに学生生活を終えてしまう。その前に子育てで体験をするのだ。実際に子育てをした実習生の脳波を計測したところ、2 週間の実習の前より後の方が赤ちゃんの泣き声を聞いたときに脳が活性化されたという結果が出ている。⁵⁴この 2 週間で子育ての仕方を学べただけでなく、赤ちゃん

⁴⁷ 近藤真理子「地域の子育て支援のニーズの変化と今後の課題」『和歌山大学教育学部』2012 年、p15-16

⁴⁸ 本間綾「子育てにおける母親の役割について」『学術研究論文集 第 12 号』、2005 年、p86-87

⁴⁹ 日本保育協会『子どもが育ち親も育つ地域がつながる子育て支援』日本保育協会、2012 年、pp17-28

⁵⁰ 田代勝良『子育て支援施策の課題と展望』2004 年、pp11-21

⁵¹ 子育て中の親と子供の支援を目的にし、行政や地域、専門機関と連携しながら地域に根差した活動をするもので、最も古いもので 1988 年に設立されている。

⁵² 赤星まゆみ「フランスにおける「緑の家」の運動と展開」『日本保育学会大会発表論文集』2002 年、p. 168-169

⁵³ もともとは、ドルトとともに保育学校入学前の子供がその親とともに受け入れられる場を設立したいと考えた数人の精神分析家たちの取り組みから生まれたもので、1979 年に初めてパリで創設された。

⁵⁴ 久保恭子・田村毅・倉持清美・及川裕子・岸田泰子「出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響」『東京学芸大学紀要、第 6 部門、技術・家政・環境教育』2004 年、pp31-40

に対する愛着が湧いていることから、実際に子供を産んだ時に子育て初心者でなく経験者として子育てできるので出産後の子育てに対する不安をある程度解消することができる。

3 つ目はイクメン⁵⁵の普及だ。第 2 章で述べたとおりアロマザリングは必要だと思われているが定着していない事実がある。そこで夫にも育児を手伝ってもらうことで母親の負担が減るのではないかと考えた。しかし育児休暇を取りにくい現状⁵⁶がある。なぜなら今の上司の子育ての時は地域コミュニティが今より活発であり子供を預かったり面倒を見てくれる人がいたのでわざわざ育児休暇を取る必要がなかった。だが地域コミュニティが希薄になっている現在育児休暇を取らざるを得ない状況になっている。育児休暇を取りやすい環境を作れば今の若手社員がさらに育児休暇を取りやすくなる。そうなれば母親の子育ての負担が少なくなるだろう。⁵⁷

コメントの追加 [12]: 注

第 4 章 現代の育児にアロマザリングがもたらす可能性

近年の日本では少子化が問題となっている。これは、進み続ける核家族化、都市化による母親の育児における孤立が理由の 1 つといえる。そうした育児の孤立がもたらす結果として産後鬱に陥り、母親は子育てにおいて不安を抱えてしまっている。こうした問題の解消の一端を担うのがアロマザリングである。アロマザリングは本来すべての霊長類にみられる育児形態の 1 つ⁵⁸であるが、この行動は現在の日本の育児環境では難しいものになっている。しかし多良間島の子供たちはその環境によっておのずとアロマザリングといえる育児形態をとっており、「守姉」といわれる独特の風習も残っている。また、チンパンジーにおけるアロマザリングとヒトにおけるアロマザリングを比較することで、人間は生物学的にもアロマザリングが必要とされる育児形態を持つことが分かった。⁵⁹つまり現在の深刻化する日本の育児において、アロマザリングを定着させることが必要だということがわかる。

しかし、現状の日本はアロマザリングを行う育児環境ではない。そこで実際に母親に向けてアンケートを実施したところ、ほとんどの母親は育児に対して悩みを抱えているもののその悩みを打ち明ける場が整っておらず、また自分の子どもの世話を他人に任せることに対しても抵抗を持っているということが明らかになった。こうしたことからやはり現代の日本が抱える核家族化⁶⁰、それと並行して進んだ地域コミュニティの希薄化といったものによって母親は孤立⁶¹し、その結果として本来人間が自然的に行うはずであるアロマザリングが定着しない環境になってしまったと考える。つまり現代の育児環境の解消にはアロマザリングが重要であり、そのためには母親が安心して悩みを打ち明けられる環境の整備、さらには老若男女の垣根を超えて皆が育児に対する意識付けを行っていかねばならないのである。

コメントの追加 [13]: 注

本稿では現代日本の育児環境の把握、そしてアンケート調査などを用いて現代日本の育児が抱える問題をどのように解消していくかを考察してきた。以上より我々は、人間本来が持ちうるアロマザリングの定着が必要であり、そのためには母親を取り巻く環境の改善が必須

⁵⁵ 子育てする男性(メンズ)の略称で、積極的に子育てを楽しみ、自らも成長する男性を指す。

⁵⁶ 厚生労働省によると、平成 25 年度の子育て休業取得率は女性が 76.3%、男性が 2.03%となっている。

⁵⁷ 藤野敦子「男性の育児休業についての課題」『京都産業大学論集、社会科学系列』2006 年、pp161-178

⁵⁸ 柏木恵子、根ヶ山光一『ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える』有斐閣、2010 年、pp8-19

⁵⁹ 松沢哲郎『進化の隣人—ヒトとチンパンジー』岩波書店、2002 年、pp23-53

⁶⁰ 家計経済研究所『現代核家族のすがた：首都圏の夫婦・親子・家計』家計経済研究所、2009 年、pp32-48

⁶¹ 生協総合研究所『核家族化で孤立する若い母親たちの安心子育てネットワーク形成モデル事業 報告書』生協総合研究所、2001 年、pp19-42

であると結論づける。

参考文献（外国語論文）

- Fairbanks L.A. Reciprocal benefits of allomothering for female vervet monkeys, *Anim. Behav.*, 40 (1990), pp553-562
- Kumar Awadhesh, Solanki Ghan Shyam, Sharma B.K. Observations on parturition and allomothering in wild capped langur, *Journal of Primatology*, Springer-Verlag Tokyo, 46 (2005), pp215-217
- Nishida T, Alloparental behavior in wild chimpanzees of the Mahale mountains, Tanzania, *Folia Primatologica*, 41 (1983), pp1-33
- Chism, J, Allocare patterns among Cercopithecines. *Folia Primatologica*, 71 (2000), pp55-66

参考文献（外国語本）

- Hiltrud Otto, Heidi Keller, *Different Faces of Attachment : cultural variations on a universal human need*, Cambridge University Press, 2014
- Michio Nakamura, *Mahale Chimpanzees : 50 years of research*, Cambridge University Press, 2015
- Sarah Blaffer Hrdy, *Mothers and Others: The evolutionary origins of mutual understanding*, Harvard University Press, 2009

Caroline Lyon, Christopher L. Nehaniv, Angelo Cangelosi, *Emergence of Communication and Language*, Springer, 2007

参考文献（日本語論文）

- 赤星まゆみ「フランスにおける「緑の家」の運動と展開」『日本保育学会大会発表論文集』2002 年、p.168-169
- 加来秀俊、宮崎紀子、宮崎正浩「日本版エジンバラ産後うつ病質問票に現れる褥婦の"何となく不調な感情"をどのように読み取り支援に繋げていくか：その有効可能性と早期からの臨床心理学的支援方法の考察」『活水論文集—文学部編』活水女子大学、2016 年、pp123-141
- 具志堅邦子「守姉という存在」『地域文化論叢』沖縄国際大学大学院地域文化研究科、2013 年、pp45-63
- 久保恭子・田村毅・倉持清美・及川裕子・岸田泰子「出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響」『東京学芸大学紀要、第 6 部門、技術・家政・環境教育』2004 年、pp31-40
- 小林佐知子『産後抑うつ状態に関する心理学的研究の概観』名古屋大学、2006 年
- 申沙羅、山田和子、森岡郁晴「生後 2～3 か月児がいる母親の育児困難感とその関連要因」『日本看護研究学会雑誌』日本看護研究学会、2015 年、pp35-40
- 近藤真理子「地域の子育て支援のニーズの変化と今後の課題」『和歌山大学教育学部』2012 年、p15-16
- 根ヶ山光一「アロマザリングからみた保育園と守姉」『心理学ワールド』日本心理学会、2013 年 7 月、p5-8
- 根ヶ山光一「“アロマザリングの島”における子育て」『日本教育心理学会総会発表論文集』日本教育心理学会、2015 年 8 月 19 日、pp6-7
- 根ヶ山光一「霊長類を通してみたヒト乳幼児の母子関係—反発性の視点から」『心理学評論』45、2000 年、pp399-410
- 根ヶ山光一、河原紀子、福川須美、星順子「家庭と保育園における乳幼児の行動比較：泣きを手がかりに」『こども環境学研究』こども環境学会、2008 年 12 月号、pp41-47
- 根ヶ山光一「子どもの身体・発達とアロマザリング」『子ども学』萌文書林、2014 年、p118-135
- 藤田泉「社会的ネットワークの一環としての母性：“アロマザリング”の視点から考える」『平成音楽大学紀要』平成音楽大学、2012 年、pp61-71
- 藤野敦子「男性の育児休業についての課題」『京都産業大学論集、社会科学系列』2006 年、pp161-178
- 明和政子、「社会的活動の進化」『BRAIN MEDICAL』21(2)、2009 年、pp173-179
- 山口真美・明和政子・金沢創・友永雅己、「既知顔認知の初期発達—ヒト・ニホンザル・チンパンジーの比較発達実験」『電子情報通信学会技術研究報告』HCS2000-41、2000 年、pp21-28

参考文献（日本語本）

- 浅井春夫、吉葉研司『沖縄の保育・子育て問題—子どものいのちと発達を守るための取り組み』明石書店、2014 年
- 伊藤嘉昭、『社会生態学入門—動物の繁殖戦略と社会行動』東京大学出版会、1982 年
- 泉武『シマに生きる—沖縄の民族社会と世界観』同成社、2012 年
- 大日向雅美『母性愛神話の罫』日本評論社、2000 年

家計経済研究所『現代核家族のすがた：首都圏の夫婦・親子・家計』家計経済研究所、2009 年

柏木恵子・平木典子『家族の心はいま—家族心理学から考える』東京大学出版会、2009 年

柏木恵子『子どもが育つ条件—家族心理学から考える』岩波書店、2008 年

柏木恵子『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学、1981 年

柏木恵子、東洋『社会と家族の心理学』ミネルヴァ書房、1999 年

柏木恵子、東洋、ヘス、R.D.、『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会

柏木恵子、根ヶ山光一『ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える』有斐閣、2010 年

久保けんお、杉本信夫、高江洲義寛『鹿兒島沖縄のわらべ歌—日本わらべ歌全集 26』柳原出版、1980 年

佐倉統『進化論の挑戦』角川書店、1997 年

杉山幸丸『サル百科』データハウス、1996 年

生協総合研究所『核家族化で孤立する若い母親たちの安心子育てネットワーク形成モデル事業 報告書』生協総合研究所、2001 年

田代勝良『子育て支援施策の課題と展望』2004 年、pp11-21

田沼武能『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』講談社、1995 年

中川尚史『サバンナを駆けるサル—パスタモンキーの生態と社会』京都大学学術出版会、2007 年

西田利貞『チンパンジーおもしろ観察記』紀伊国屋書店、1994 年

日本保育協会『子どもが育ち親も育つ地域がつながる子育て支援』日本保育協会、2012 年、pp17-28

根ヶ山光一『アロマザリングの島の子どもたち—多良間島子別れフィールドノート』新曜社、2012 年

バロン＝コーエン,S.、『共感する女脳、システム化する男脳』、2005 年、日本放送出版協会

船橋恵子『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房、2006 年

正高信男『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』講談社、1995 年

正高信男『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』講談社、1995 年

松沢哲郎『進化の隣人—ヒトとチンパンジー』岩波書店、2002 年

松沢哲郎『想像するちから—チンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店 2011 年

三浦慎悟『哺乳類の生物学 4 社会』東京大学出版会、1998 年

参考 URL

文部科学省「家庭環境の現状とその支援上の課題」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpba200501/001/002/0102.htm (最終閲覧日 2016 年 9 月 25 日)

内閣府「平成 25 年度家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/index.pdf.htm> (最終閲覧日 2016 年 9 月 26 日)